

義民伝承と奉納競技

—鬼北町日吉における武左衛門相撲の史的展開—

A Physical Competition in Honor of Gimin (Fighters for Justice): Historical Development of the “Buzaemon-style Sumo” in the Hiyoshi District of Kihoku Town

高津 勝

KOZU, Masaru

Abstract

This article deals with the historical development of the ceremonial sumo tournament known as “Buzaemon-Sumo”, which takes place during the Bon festival in the Hiyoshi District of Kihoku Town in Ehime Prefecture.

The forerunner of this tournament was the “Rokujizo-Sumo” (sixth Jizo sumo wrestling tournament), which was held to honor the ancestors of the inhabitants of the Hiyoshi District and which first took place in the Edo period. Since 1935 the “Rokujizo-Sumo” has been held in front of the Buzaemon monument, erected in 1927 to honor Buzaemon and his comrades for their great deeds during the peasant uprising of 1793, and since the 1930s the tournament has been very much influenced by the cult of Buzaemon. When the golden age of this sumo event reached its peak in the 1950s, people began to refer to it not as “Rokujizo-Sumo” but as “Buzaemon-Sumo”.

Because of the migration of young people into the major Japanese cities as a result of the economic growth after the late 1950s, support for sumo began to decline. In spite of some attempts to revive the tournament in the 1970s and 1980s, it continued its decline. Today the “Buzaemon-Sumo” festival is associated more with children than with adults and the number of spectators is decreasing.

This is because of individualism, urban lifestyles, the diversification of people’s values and leisure activities, and the pressure of work, as a consequence of Japan’s economic growth, together with new trends like globalization. In my opinion, more should be done to revitalize festivals such as the “Buzaemon-Sumo” in the Hiyoshi district. In short, think globally and act locally.

Key words: ceremonial sumo wrestling tournament, peasant uprising, folk festival, tradition, globalization

キーワード：奉納相撲、百姓一揆、民俗的祭り、伝統、グローバリゼーション

はじめに

本論に入る前に、調査地である愛媛県北宇和郡鬼北町日吉（旧日吉村）の概要を示しておこう。当該地は松山市から南へ80km、宇和島市から東北へ35km、四国山地の南西に位置する。高研山たかとぎやまをはじめ標高1,000mほどの山々が高知県と境を接し、山間を父野川ちちの、日向谷川ひゅうがいの、上鍵山川かぎやまが縫うように流れ、川沿いの平坦な地に集落と耕地が点在する。

藩政期以来それらの集落を東ねてきた日向谷、父野川、下鍵山しもかぎやま、上鍵山かみかぎやま、上大野かみおのの五ヶ村は、日吉村の成立（1890年4月）とともに大字となって村域を構成し、比較的平

地の多い下鍵山には行政・商業・文化の要をなす町場が形成され、ここを基点に交通網が整備された。隣接する町村に、東宇和郡城川町（現西予市）・北宇和郡広見町（現鬼北町）・松野町・高知県高岡郡梶原村・幡多郡十和村（現四万十町）がある。

2002年度『日吉村勢要覧』¹⁾によれば、総面積89km²のうち山林が87%、田は1%、畑が2%、その他（池・沼・その他）9%を占める。主要産業である農林業の生産額（2000年度）は2億7千8百万円。そのうち木材が1億8百万円（39%）、米が4千8百万円（17%）、ユズが3千7百万円（13%）を占めており、産業の中軸を林業が担っている。だが、山林保有戸数362のうち20ha未満が84%、農地の耕作規模についても、農家戸数278のうち所有耕地面積1.0ha未満のものが90%を占め、総じて経営

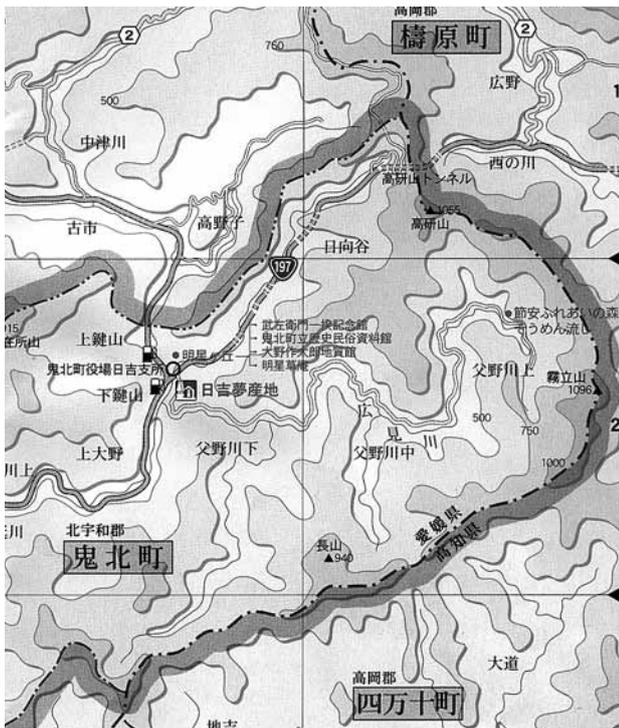


図1：愛媛県北宇和郡鬼北町日吉（旧日吉村）地図

規模が小さく、農外所得に依存する。だが、産業構造は変化しており、産業別人口を1970（昭和45）年と2003（平成7）年で比較した場合、第3次産業（サービス業など）は横ばいだが、第1次産業（農林関係）は3分の1以下に激減し、第2次産業（製造・建設業など）は2倍に増えている。

昭和戦前期まで3千人台だった人口は、1947（昭和22）年に4千人を超え、1955（昭和30）年には4,779人に達した。その後、高度成長のもとで若者が都市に流出し、30年間で人口は半減する。1970（昭和45）年、過疎振興地域に指定されたが、過疎化の勢いは止まらず、2000年には人口は1,933人（うち男子47%、世帯数725）に落ち込み、減少はいまも続く。ただし、世帯数に人口ほどの大きな変化はない。こうしたなか、2005（平成17）年、広見町と合併し、鬼北町に属することになった（図1参照）。

以上の概観を呈する鬼北町日吉（旧日吉村）だが、「一揆」と「メーデー」の里としても知られている²⁾。1793（寛政5）年に吉田藩全域の百姓が立ち上がって圧政と搾取に挑み、農民が勝利した吉田騒動（武左衛門一揆）の頭取は上大野の百姓だった。1922（大正11）年には、四国初のメーデーをここで開催している。さらに日吉は相撲の盛んな地で、盂蘭盆会の8月24日に下鍵山で開催される奉納相撲は「六地藏奉納相撲大会」、「武左衛門奉納相撲大会」、「六地藏奉納武左衛門相撲大会」などと呼ばれ、近隣の町村に名をはせた。ではなぜ、この相撲に一

揆の指導者の名を冠するのか。六地藏相撲と武左衛門相撲はどういう関係にあるのか。こうした問題関心が、われわれを日吉へと誘うのである。

この相撲に関する初発的な研究に、半田康夫の秀作がある。半田は和歌森太郎を団長とする「愛媛県宇和地帯民俗総合調査団」の一員として1959（昭和34）年8月に日吉村を訪れ、報告書に、「旧7月19日の、医王寺で行われる「大日さん相撲」や、同月24日の「地藏相撲」など、仏への奉納相撲が盛大に行われた。後者は今では「武左衛門相撲」とよばれ、百姓一揆の頭目であったという武左衛門の霊を慰めるために行なわれ、期日も8月24日になっている」³⁾と記している。要領を得た記述であるが、行事の名称変更の理由や時期を明記しておらず、百姓一揆との関連についても表面的な記述に終わっていて、解明すべき課題を残す。

1968（昭和43）年に刊行された『日吉村誌（明治百年記念）』は、第11章（民俗）第2節（年中行事）、同第6節（俗話、娯楽）、第14章（名所旧蹟）第3節（名勝）第2項（武左衛門広場）に、下鍵山の奉納相撲を簡潔に記述している⁴⁾。「年中行事」、「娯楽」、「名勝」という複数の視点から対象に接近し、参与観察にもとづいて当事者が歴史的証言を記した点に、この叙述の特徴と価値がある。ただし、内容が断片的で、当該相撲行事の性格についても「地藏様や、武左衛門相撲への奉納相撲」という不明確な規定にとどまっており、かならずしも本稿の問題関心に即応しない。

この相撲行事の性格については、「ある種の葬送儀礼的な意味」をもつ「六地藏供養」であると規定する宇佐美隆憲の事例研究がある⁵⁾。同研究で宇佐美は、「儀礼」という枠組みのもと、1995（平成7）年8月24日の「六地藏奉納相撲の実際」を正確に描写している。参与観察と当事者からの聴き取りを介して、競技の場面にとどまらず、「これと一対の関係にある念仏」供養を正確に記録し、この相撲行事の存続要因が六地藏供養や武左衛門への信仰心にあることを示唆した点に、この事例研究の特徴があるといえる。ただし、示唆にとどまり、それ以上の論述はしておらず、六地藏相撲と武左衛門一揆との関係についても具体的に論究していない。宇佐美の最大の問題関心は、この奉納相撲を「葬送儀礼」として意義づけることにあった。問題関心のそのような限定が、考察の対象と視野を狭め、この行事を多様性において理解する道を閉すことになったのである。

最後に、先行研究の紹介にかかわって、筆者の編集した当該相撲行事に関する「聞き書き」⁶⁾をあげておこう。武左衛門相撲と六地藏相撲の関係の究明を主題にし、2011年7月と2012年8月の2回にわたってフィールドワークを行ない、そこで収録したインタビューの結果を冊

子にしたものである。1950年代に日吉村で活躍した5名の草相撲力士と村史研究家の証言は、最盛期の下鍵山の奉納相撲を知るうえで価値があり、文書資料や史跡などと照合すれば、より正確で豊かな情報をもたらすことになるだろう。

先行研究・文献に関する上述の紹介と論点整理をふまえ、本稿では、下鍵山の孟蘭盆会奉納相撲を中心に生じた鬼北町日吉の相撲風俗を、民間信仰・民俗的祭り・民衆娯楽・地域交流・地域おこしなど、さまざまな機能や実態の錯綜する社会的・文化的な事象とみなし、多様性と歴史性に留意しながら、この地域で生をとにもした人びとの未完の契機を含む主体形成の営みとかかわらせて考察することにした。

I. 日吉村における奉納相撲の伝統

1. 相撲に関する説話

日吉村は古くから草相撲が盛んであったらしく、説話や史跡を多く残しており、たとえば『日吉の民話』⁷⁾は、藩政期に遡ることのできる5編の相撲説話、すなわち「人造^{じんぞう}測の話」、「日の出山」、「伊予地蔵・土佐地蔵」、「高森地蔵」、「奉納相撲」を掲載する。

それらの説話は、下鍵山など、村の行政・経済・文化の中心をなす地区だけでなく、日向谷、富母里^{ふもり}、節安^{ふしやす}、犬飼^{いぬかい}など、村域の周辺や県境の集落で語り継がれており、伝承母体のこのような遍在は、集落の規模や地勢にかかわらず、村内各所で相撲が広く行なわれたこと示唆している。2011年7月に実施した聞き取り調査でも、「昔は娯楽がなかったけんなあ。もう草相撲しかなかったけん。若い時分は。唯一の娯楽じゃってなあ。(中略)いまの武左衛門広場というところで、毎年、対抗相撲よ。当時、青年団がだいぶいたけんなあ。1部落に30人から40人、青年団がおった。全部、炊き出しでなあ。応援ものすごく大きいし、1年に1回はお祭りよ。相撲祭りよなあ」⁸⁾という語りを聞くことができた。高度成長期以前の日吉村の若者や子どもたちにとって、相撲は最大の娯楽だったのである。

加えて、地蔵山や高森山、高研山など、高知県と境を接する日吉村の山々の頂や峠には地蔵菩薩が祀られていて、上掲の相撲説話は、修験者(山伏)や僧侶の司宰する縁日に相撲が奉納されたと伝えており、相撲と山岳信仰・地蔵信仰の結びつきを示唆している⁹⁾。

以上のことを念頭に置き、説話をてがかりに、日吉村における相撲の伝統を明らかにすることにした。

まず「人造測の話」(父野川富母里)であるが、相撲好きの河童と対戦して勝利した人造が、結果を口外しないことを条件に多大の報酬を得たにもかかわらず、約束を

反故にし、他日、釣りに出たところ、測に引き込まれて水死する話である。訓話の一種だといえる。

「日の出山」(日向谷)は、1846(弘化3)年に日向谷の農家に生まれた剛力無双の吉川清治こと日の出山が、1866(慶応2)年、巡業で宇和島に来た江戸相撲の大関格と互角に渡り合い、誘いを受けて東上を夢見るが、庄屋に諭されて翻意し、故郷に留まって親孝行に励み、地域の中堅の人物に成長する話である。日の出山は「正々堂々と真正面から勝負する本格派」で、相貌はいたって温順だが相撲では負けることを知らず、50歳を過ぎても「隠居山」の四股名で活躍し、「終生粗衣粗食に甘んじて田畑を耕やかしてすがすがしい気持ちで鍬を揮い薪を負うて暮らした」と語られている。事実、彼は山仕事に従事し、旅館や「駄賃馬」(荷駄)の経営に携わりながら日向谷に相撲場を設け、若者を指導した。晩年、高知県梶原村の西の川に移り、生涯をまっとうする。墓碑には1936(昭和11)年11月没、行年91歳、「四国大関」の刻印がある。彼の四股名は同じ日向谷出身の井上清に引き継がれ、この力士もまた草相撲で活躍する。次男坊ゆえ家督を継承せず、八幡浜に転じて運送業を営み、成功裡に人生を終えたと伝えられている¹⁰⁾。

吉川清治や井上清の育った日向谷では、1906(明治39)年、山腹の集落・中屋敷の堂に馬頭観音と大日如来を合祀し、以後、愛宕神社と称して旧暦3月24日と9月24日に日除け祈願の三十三番相撲を奉納した¹¹⁾。図2がその神社で、過疎化とともに成人力士は姿を消し、主役の座を子どもたちに譲る。だが、伝統行事を守ろうとする地域の意気込みは今も絶えない¹²⁾。

「伊予地蔵・土佐地蔵」(父野川節安)は、旧暦3月24日に地蔵山山頂(標高1,096m)付近で行なわれる縁日の話である。山頂は日吉村と高知県幡多郡大正町、十和村の分岐点に位置し、十和から日吉に抜けるお伊勢道があったとされる。「その昔、地蔵山の山林で木の切り出し作業中、谷川の堰^{せき}が崩壊。一瞬のうちに貯蔵していた大量の木材や川水があふれ五十人もの山の男の命を奪った。その後、雨の日になると木出し歌や“カラーリ、カラー



図2：愛宕神社の相撲場

り”と木の音が聞こえ、この死者の霊を慰めるため、二つの地蔵がまつられた¹³⁾。2体の菩薩のうち、伊予地蔵は風化のため碑文を判読できないが、土佐地蔵には「享保十三申年」(1728年)の刻印がある。縁日には山頂の広場に出店が並び、戦前まで地元の強豪力士の参加する相撲もあった。酒気帯びで喧嘩が絶えなかったことから、この祭りは「けんか地蔵」と称され、「付き合い地蔵」「縁結び地蔵」「雨地蔵」という別称もあった。伊予人と土佐人が親交を深め、男女が契りを交わし、雨にもよくたたられたことから、こうした呼称が生まれたのである。足をわずらった人が完治を願い、杖をもって参ったことから、「ツエ地蔵」ともいわれた。相撲や露店は絶えて久しいが、「予土親善」を確かめ合う縁日の伝統は70年代末まで続き、救済を願う参拝者の心と体を癒した¹⁴⁾。

「高森地蔵」(上大野犬飼)の話もまた、地蔵信仰由来し、日吉村犬飼と高知県十和村の境にある地蔵菩薩の縁日を題材にする。立像の地蔵には「文政八年乙酉三月二十四日」¹⁵⁾の碑文があり、旧暦3月21日の縁日に両集落の修験者、区長、当番、参拝希望者(入り子)が参拝して心経や地蔵経をあげて死者を供養したとされ、かつては地蔵を安置する石室の前の四隅に竹を立て、注連を張り、両村合同で相撲をすることもあったという。

以上のように、日吉村の相撲説話の多くは、衆生の救済を旨とする地蔵信仰と結びつき、立志伝や人生訓、戒律だけでなく、無病息災や縁結び、家内安全、祖霊慰撫、犠牲者供養などなど、救済と幸福を求める民衆の多様な願望を表象した。県境や村境に鎮座する地蔵菩薩の縁日に開催される奉納相撲は、村落共同体の境域を顕在化して帰属意識を高めただけでなく、人びとの心と体を解放して越境を促し、交流を深める契機でもあったといえよう。相撲説話に織り込まれたこうした主題は、下鍵山の「奉納相撲」にも通底する。

2. 下鍵山の六地蔵「奉納相撲」

明治維新以降、陰暦から陽暦への転換や神仏分離、神道の国教化、神社の統合と合祀といった開化政策のもと、年中行事の中核を担う若者組は抑圧され、地芝居とともに民俗的祭りの華であった草相撲は、「然レトモ是等ハ却テ淫靡^{へいとう}ノ弊竇ヲ遺スノ憾ナシトセズ」¹⁶⁾と批判され、「文明化」の洗礼を受けた。それでも、草相撲は組織再編や風俗浄化の試練をへて窮地を脱し、明治末から大正・昭和にかけて生氣を取りもどす。

「村民一般ニ道楽ヲ好マズ。然レトモ相撲ニハ特別ノ興味ヲ有シ、村内多数知名ノ力士ヲ出セリ」¹⁷⁾。これは日吉村に近接する多田村の明治末年の風俗習慣に関する描写だが、こうした光景の底流には、日ごろ山仕事や農作業で鍛えた身体力を祭りや縁日で競い合おうとする若者

の気概、さらには、立間村八幡神社の「卯の刻角力」に代表される祭礼自治の精神、すなわち「角力奉仕中は藩主の御社参といえども社門内に入ることを許さない」¹⁸⁾とする民俗的祭りの伝統があった。

奉納相撲といえば、秋の収穫祭を機に神社で開催される宮相撲が一般的だが、南予では盂蘭盆会の夏相撲も結構盛んで、踊りのあとに櫓^{やぐら}を解体して競い合う観喜光寺(一本松村正木)の「踊り相撲」や、全村から力士や参詣者が集まり、他郷の者も加わって活況を呈した臨江寺の「黄檗相撲」(津島町岩松)などが広く知られていた。日吉村では、上鍵山の曹洞宗・医王寺の「大日さん相撲」(旧7月19日)や下鍵山の「六地蔵相撲」(旧7月24日)が盛大に行われた¹⁹⁾。前者は過疎化とともに消滅し、「子供相撲甚句」を残すのみとなるが、後者は開催日を新暦8月24日に改め、伝統を今日に引き継いでいる。

下鍵山の六地蔵相撲の由来については、この地域に流行した伝染病の厄払いを神仏に祈願し、毎年、三十三結び(三十三番)の相撲を奉納すると約束したことに始まる、とする説話が伝承されている²⁰⁾。長年にわたりこの行事の顧問役を務める葛本重利氏も、「厄払い」説を採用しており、彼が書き記したこの行事のマニュアルともいえる覚書「六地蔵奉納相撲(武左衛門相撲)」²¹⁾の副題には、「8月24日 裏盆の日に厄払いとして33結びを奉納」とある。下鍵山区の住民や相撲愛好家の多くは、この相撲を「厄払い」の行事とみなしている。

六地蔵相撲の始期については、『日吉村誌』(2004年刊行)に収録する先述の説話「奉納相撲」に「百八十年ほど前」とあり、文字通り換算すれば文政年間ということになる。ただし、稀にはあるが、「明治時代から始まった」²²⁾とか、「明治末ごろ始まった」²³⁾と語られることもある。以上の伝承をもつ六地蔵相撲であるが、この行事の性格や特徴を正確に理解するには、下鍵山の地蔵信仰や六地蔵菩薩の造立と関連づけて考察する必要がある。実証をふまえたものではないが、次の聞き書きが参考になる。引用しておこう。

六地蔵は、地域の人たちの幸せを守ってもらいたいという願いで作られたのです。六地蔵には、六つのめい界というのがあり、一つ一つに意味があります。(中略)生前の人間の犯した悪業によってそれぞれ異なった道へ落ちるそうです。毎年夏には、六地蔵相撲が行われています。この奉納相撲は、昔からの伝統行事になっています。これは、人びとに幸せを授けてもらう六地蔵に、お礼の意味でにぎやかな催しとして、境内で相撲をとるようになったのがその始まりです。でも一時は、相撲をとる人がいなくて、やめてしまったこともありました。それ以来、村の人たちは、赤痢にか

かり生活が苦しくなっていたりしました。これは、奉納相撲をしなくなったから六地藏が怒ってしまったと村の人たちは考え、病気を治してほしいという願いをこめて、三十三結びの相撲をとるようになったといわれています。昔は、田植えや祭りなどのあとには、その地域の人たちが集まって、六地藏に無事終わったことを報告して、お祝いをしています。²⁴⁾

ちなみに、地藏とは地獄・餓鬼・畜生・修羅・人・天の六道をさまよひ歩く衆生を教化し、救済に導く菩薩であるとされ、上掲の聞き書きには、1755(宝暦5)年、下鍵山と日向谷の庄屋の発起により、村びとが浄財を募って六体の地藏菩薩を造立してかやぶきの堂に安置し、長きにわたってこの場を村落の憩いと祝いのセンターとして活用したとある²⁵⁾。

以上の伝承を整理すると、下鍵山の六地藏相撲は、藩政期のある時点で疫病の蔓延という共同体存立の危機に直面し、これを契機に地藏信仰と相撲習俗が接合され、奉納という形態をとって行われるようになった、ということになる。さらに、地藏信仰と奉納相撲の関係を正確に理解するため、以下の諸点に留意しておきたい。

第1に、疫病救済祈願に示されるように、下鍵山の地藏信仰は、現世における幸福祈願を基調にしていた。この点で、彼岸ではなく現世での利益信仰に基礎を置く近世以降の地藏信仰と符合する。

第2に、民俗信仰としての地藏信仰は、一般的に、個人を基調にした現世利益信仰を中心に展開した。だが、下鍵山では、祖霊供養や死者供養を、家や個人だけでなく、村落共同体の行事として意義づけている。この点は、共同体や集団としての祈願を重視する神道系の信仰に類似する。

第3に、「石地藏＝祖霊」説に注目しておこう。この説にしたがえば、「石地藏はもともと堺で外からの侵入者を防遏する石棒を神格化した道祖神であり、石棒は男根からイメージされた祖霊のシンボルで、石棒を道祖神と呼ぶのは道祖からの転用である。したがって、地藏は祖霊」²⁶⁾である、ということになる。この理解を転用すれば、下鍵山の地藏信仰が祖霊信仰と深くかかわる所以を容易に理解できるだろう。加えて、祖霊信仰を仏教化したものが下鍵山の地藏信仰であるとする理解を演繹しうる。

第4に、下鍵山の明星ヶ丘にある地藏尊堂(1935年に現在地に移転)と六体の菩薩に注目したい。六体の菩薩の右には「不動明王」、左に「下鍵山区祖先位牌堂」が配置されている(2013年8月24日現在)。例年8月24日(以前は旧暦7月24日)には、相撲の奉納に先立ち、地藏尊堂に区の役職者や世話人が集まり、施餓鬼の日(8

月15日)と同様、六地藏への読経と念仏供養太鼓の法事を行ない、このあと新仏を位牌堂に合祀する²⁷⁾。この行為は、相撲の奉納が祖霊供養に組み入れられていること、すなわち、区民が地藏＝祖霊に対して約束した相撲の奉納を、区の代表が地藏＝祖霊に宣誓することを意味する。敷衍すれば、奉納相撲の開催は、区民にとって祖霊との約束を履行する行為、すなわち約束を履行することによって救済を求める行為、つまり、五体投地・御百度参り・巡礼などに同じく、過去に犯した罪をあがない、救済を求める苦行・贖罪・作善にも似た滅罪の行為として行われるものであったとみなしうる。

ただし第5に、奉納される相撲の競技そのものは、仏事ではなく、あくまで仏事に興を添える供え物、すなわち余興であって、競技としての相撲の形式と内容は、信仰から導き出されるのではなく、あくまで相撲界が形成した固有の文化様式に規定されていた。

II. 義民顕彰運動と武左衛門相撲の生成

1. 武左衛門一揆・義民供養・上大野の秋季奉納相撲

1793(寛政5)年2月、特産の紙の特権商人法華津屋に買上げさせる専売制度と庄屋野役(庄屋が使役する夫役)の廃止などを求め、吉田藩内のほぼ全村の百姓が宇和島藩領の中間村(宇和島市伊吹町)へ逃散・出訴した。一揆側が吉田藩との交渉を拒否したため、家老・安藤継明は割腹自殺するが、藩は宇和島藩の仲介により要求を全面的に受け入れた。勝利した一揆の頭取とされる人物が、上大野村の武左衛門である²⁸⁾。2年後(一説には1年後)、藩は武左衛門を捕縛し、晒し首にすただけでなく、死後の影響を恐れて供養の石碑を破碎し、武左衛門に対する祭典を一切禁じた。その後、武左衛門は門付芸人となって一揆を組織したという義民物語が形成され、盆踊り、祖先念仏、亥の子唄、子守唄、太鼓打ちなどを介して供養がひそかに行われるようになり、藩政期から明治末年にかけ、「村々の施餓鬼の日(七月十五日頃)に盛んに鐘太鼓を鳴らして観音菩薩への供養だと云つて特に一席の念佛を唱へたのが其真意は武左衛門の追善の爲めにしたのである」²⁹⁾とする習俗が南予一帯に定着する。

割腹した安藤もまた藩の危急をすくった忠臣とされ、切腹した場所に碑が立ち、1874(明治6)年、旧屋敷あとに安藤神社が設立された。

藩政期には、表立った武左衛門供養はばかられたが、日吉では、一揆衆が凱歌をあげて村に帰ったときの感激を再現する「帰村」という音頭をもって、盆踊りが締めくくられた。武左衛門を「もどす」という願いを込めて、オクゴエ(人の失踪をよぶ声)で次のように唄ったのである³⁰⁾。

- 1節 わしが、村でじまんの種は、人の為にと、
我が身を捨てる
- 2節 神としたわれ、其の名を 残す、花の ものの
ふ、あの武左衛門
- 3節 いっき 起こしは罪悪 なれど、仲間 助けに
命を捨てる
- 4節 太鼓、たたいて、ほら貝 吹いて、むしろ 旗
立て、立ち上がりたる
- 5節 向ふ所は八幡 河原、悲願 成就の散華唄
- 6節 つるをはなれた弓矢の ごとく、吉田 城かに
鳴りひびけ
- 7節 みたま祭だこよひの 踊り、供養 太鼓にかね、
よもすがら
- 8節 唄いなされや、日吉の 里で、踊る 笑顔は、
この世の花よ
- 9節 黄金波うつ、豊年 踊り、祝え 唄え、たたえ、
武左エ門
- 10節 年に一度のこよいの 祭り、のこせ、のち、の
ち、子やまごまでも
- 11節 村中あげて、祝えや 供養、踊り、後の世まで、
語り草

日吉村に近接する広見町では、盆祭りに「吉田騒動」という武左衛門口説がうたわれ、「一つ非道のお裁きなされ、二つ不思議は下から起こる、三つ三間から騒動がおこる」などと、村びとが群れをなし、暗闇に乗じて一揆の正当性と農民の力を確認し合った。

寛政一揆の頭領を輩出した日吉村上大野には、武左衛門を追善供養する習俗・説話・記念物が多く残されており、代表的なものの1つに「武左衛門いちよう」³¹⁾がある。この大銀杏は、武左衛門の屍を埋葬したかどで廃寺に追込まれた瑞林寺(庵寺)の跡地に育ち、1808(文化8)年には、一揆のあと逃走して刑を免れた武左衛門の同志・勇之進が手水石を寄進しており、毎年8月29日には念仏供養が営まれる。戦前、秋口にはここで相撲大会が開催され、上大野や下鍵山の若者が力と技を競い合った。

上大野はまた、「武左衛門の首立て木」(大字・上大野堀切)や「武左衛門の生い立ち」(大字上大野植木)、「武左衛門の首」(同左)など、武左衛門を題材にした説話を多く伝承している。これらの説話は、「百姓の小作料が高いので一揆を起こした」とか、「妻おしまがかくした首は、どこにあるかわかっていない」など、一揆を義拳として讃えつつ、他方で、武左衛門の出生や家柄、屍のゆくえを曖昧にして謎多き人物として描きだし、彼の再来、ないし新たな救世主の出現に夢を託そうとする³²⁾。

さらに上大野には、父野川との境界に位置する台状の山林に戦国時代に建てられた勝山城の遺構があり、中腹の平地には琴平(金刀比羅)宮を祀る社殿と、武左衛門様と称する茅葺の社殿があった。1897(明治30)年前後に上大野と父野川の有志によって広場として整地され、旧暦3月10日と10月10日の武左衛門様の例祭は花見や相撲でにぎわった。武左衛門様の前で行なう秋相撲には、盆踊りや祖先念仏、太鼓打ちなどと同じく、武左衛門を供養する習俗が織り込まれていたに違いない。

琴平宮は1907(明治40)年、「大字に一社」の合祀政策に沿って熊野神社に統合され、祭神を失う。武左衛門様の社殿もまた、その影響を受けて放置され、崩壊の憂き目に会った³³⁾。こうした事態が示すように、民俗的慣行は神社統合・合祀の影響を受け、大正前期に重大な危機を迎える。日吉村の初代村長・井谷正命が「各村浦に行はれた観音菩薩への供養なるものも、今は其他の念仏と共に廃れたり」³⁴⁾と危惧したように、民俗行事に織り込まれてひそかに伝承された武左衛門供養の習俗だけでなく、盆踊りや施餓鬼、亥の子行事など、武左衛門供養の母体をなす民俗文化そのものが存続の危機に直面したのである。対応策として構想されたのが、大正中期以降に具体化をみる武左衛門顕彰運動であった。1926(大正15)年、上大野をはじめ村内有志によって社殿跡にコンクリート作りの武左衛門碑が建てられ、供養の伝統は息を吹き返す。

2. 明星ヶ丘の建設・武左衛門碑建立・素人大相撲の開催

武左衛門の追善と顕彰に決定的な役割を果たした人物に、井谷正命(1867~1934年)と正吉(1896~1976年)の親子がいる。井谷家は代々、日向谷と下鍵山の2村をつかさどる大庄屋で、正命は関西法律学校に学び、板垣退助に共鳴して自由民権運動に身を投じ、24歳の若さで初代日吉村村長に就任した。その後、この村を交通・産業・文化の要衝にすべく、私財をなげうって道路建設、教育の拡充、市街区の形成に尽力し、政友会や農会の重鎮となって郡政や県政に影響を与え、南予地方の道路交通網の整備に大きく貢献した。文化人でもあり、遺詠に「吾こそは 貧しくなるも吾が郷の 栄え行くこそ 楽しみける」³⁵⁾がある。

本稿のテーマに関わって注目すべきは、井谷正命が民権運動や議会政治に共鳴して「自由民権の大義を唱道」³⁶⁾しただけなく、寛政の一揆指導者・武左衛門を「人間至大の道德を全くしたるもの」、「其身を犠牲にして斯民が塗炭の苦しみを救済した」³⁷⁾人物として高く評価し、被弾圧者・農民の立場に立って武左衛門一揆の究明と指導者の追善に取り組んだことである。1917(大正6)年初秋の「殺身成仁武左衛門翁傳」、「再度の建碑計画」、「武

左衛門翁碑文」³⁸⁾の公表は、顕彰事業の中間総括としての意味をもつ。

では、なぜ正命はこの時点で建碑を提唱したのか。第1に、武左衛門は郷土の偉人であり、南予一円の農民に「崇敬」されているにもかかわらず、いまだ「一片の墓碑すら無く、一回の祭典すら行はない」こと（彼はこの事実を、四民平等を旨とする憲政の常道にもとるものと考えた）。第2に、第一次大戦後の商工業の発展と農業の好転により、建碑計画賛同者の増大が見込まれたこと。第3に、武左衛門供養の習俗的基盤であった盆踊りや施餓鬼会などの民俗的慣行が衰退の危機に陥っており、これまでの口碑に依存した供養や顕彰では伝承が危ぶまれたこと。正命が建碑計画を提唱した理由は、以上のようにであった。

一揆後125年にあたる1919（大正8）年、正命は山口県大島で御影石を購入し、加工・刻字を終えた。運搬しようとしたところで資金が尽き、碑は宇和島港の砂利置き場に据え置かれ、この事業は息子・井谷正吉が引き継ぐことになる。

正命が郡政や県政に影響力をもつ政友会の重鎮だったのに対し、息子の正吉は社会主義者だった。正吉は1919（大正8）年4月、三重県度会郡七保村に農業技術員の職をえて青壮年を指導しながら、賀川豊彦・堺利彦・山川均・安部磯雄らと交わり、社会運動に身を投じるようになる。1922（大正11）年4月、帰郷して日吉村に「明星ヶ丘我等の村」を創設し、5月1日に同地で四国初のメーデーを挙行、ここを拠点に社会的・階級的な差別と不平等、抑圧と貧困の克服をめざす文化運動・農民運動・労働者運動・部落解放運動を展開した³⁹⁾。武左衛門碑の日吉村への曳行は、正吉たちにとって、南予一帯を視野に入れて展開しようとする「明星ヶ丘我等の村」運動の一大デモンストレーションだった。

1926（大正15）年9月、労働農民党日吉支部設立総会を機に「義農記念碑建立委員」を選出し、1927（昭和2）年5月に同党員・日本農民組合員を含む延べ4千5百人の農民・労働者の協力をえて4日間にわたる難事業を敢行し、寛政の武左衛門一揆の凱旋道をなぞりながら、地元民が造成した明星ヶ丘の広場（武左衛門広場）に石碑を搬入した。設置場所について正命は当初、武左衛門が晒し首にされた堀切（上大野村と下鍵山村の境界地）を予定したが、農村改造運動の新しい拠点づくりを構想した正吉の発案によって明星ヶ丘に変更された。碑の正面に正命の撰による「済世救民 武左衛門翁及同志者碑」、左側面に「丈夫会变 志気益剛 損軀濟難 俠骨長芳」、右側面に「大正八年春同郷後進等建之」の刻印がある（以下、武左衛門碑と略す）。建碑活動を始めて約9年、反封建と自由民権、大正デモクラシーの精神を具現する抵抗



図3：武左衛門翁及同志者碑

と社会正義、革新のシンボルが日吉の地に誕生した（図3）。5月14日に行った建碑式と祭典の様を、『南豫時事新聞』（1927年5月17日）は「武左衛門の建碑式 大変な賑ひ」という見出しで次のように伝えている。

日吉村の熊田武左衛門碑の除幕式は十四日正午より開会先づ浄土仏式により（中略）附近五ヶ寺の住職の読経あり（中略）午後一時を終了、撒餅を行ひそれより余興に入り豫め設けられた仮舞台に於いて素人仁○加鍵山芸妓の手踊り等ありて（中略）鍵山では各戸万国旗をかゝげお祭気分濃まやかに各地よりの人出多く尚散会後は素人大相撲もあつて大変な賑ひであつた。

この日は村の内外から多くの人が詰めかけ、日吉村開村以来の賑わいとなった。

3. 義農武左衛門祭と奉納素人大相撲の企画

— 義民顕彰運動から農村文化運動へ —

建碑式と余興の成功をふまえ、翌1928年には新たな祝祭が企画された。メーデー行事と義農祭をドッキングさせ、奉納相撲大会をハイライトにして動員力をアップしようとしたのである。『南豫時事新聞』（1928年5月1日）は、この企画を、「日吉村を中心に行はれる けふメーデー 義農武左衛門の碑前で雄弁大会と相撲」と題して次のように報じている。

五月一日メーデーは例年の如く日吉村を中心として泉村三島村東宇和郡山間部を糾合して行はれる筈であるが本年度よりは之を義農武左衛門祭にからみ午前十時よりは奉納メーデー記念雄弁大会を行ひ日労党の猛者十五名参加熱弁を揮ひ午後四時より奉納素人大相撲を催し喜多郡以南高知県幡多郡迄の力士を招集し大いに気聲を挙げる筈で賞品は賞金の外明星ヶ丘マーク入赤色優勝旗六旒を贈る。

だが、「奉納素人相撲は雨天のため中止」⁴⁰⁾になり、メーデー・義民祭・奉納相撲をセットにした祝祭行事は未完に終わった。ではなぜ、正吉らはこうした企画を思い立ったのか。「明星ヶ丘マーク入赤色優勝旗」は、相撲という最もポピュラーな民衆娯楽の政治的利用を意味しないか。

この時期、正吉らにとって農村無産青年の啓蒙と組織化は喫緊の課題であった。彼らは、北宇和郡内の地主層の子弟を中心にして1924(大正13)年3月につくられた農村青年党と対決するため、同年5月下旬に真正青年同盟を組織し、6月中旬には「明星ヶ丘我等の村」に研究部・農民運動部・政治部・青年部・娯楽部・教育部を設け、小作・自小作・日雇農の青年を結集しようとした。このとき、同人は1千名を超え、「農村振興、農民文化の開発、組合の設立、農村における各種の調査統計の作成」(農民運動部)や「農村娯楽の研究および施設」(娯楽部)などの施策を展開しようとしていた⁴¹⁾。こうした企画は、「無産階級青年を反動化し隷属化する官制青年団や青年訓練所の如きは滅茶苦茶だ。不振・崩壊、而してそれが直ちに無産階級的な青年団に再び組織されて行く」という認識をもとに構想され、日吉村下鍵山では、1927(昭和2)年10月1日の「義農堂秋祭」を機に、前青年分団長が発起者となって南予無産青年同盟日吉支部の発会式を行ない、青年団員と青年訓練所員全員を同支部に加盟させるまでになった⁴²⁾。

1928(昭和3)年12月、正吉は日本大衆党の結党に変わり、中央委員・県連会長に選出され、1930(昭和5)年になると同党青年部を基盤に町村部落移動式研究会を開催し、北宇和郡愛治村や日吉村、東宇和郡高山村において月例のプロレタリア科学研究会を続行した。「徒に青少年の向学心を青年訓練所の体育奨励によって欺瞞せんとしつつある官制青年団との知識的懸隔」を鮮明にし、無産青年の啓蒙と組織化を進めようとしたのである⁴³⁾。建碑式やメーデー行事と連動させた素人大相撲大会の企画は、以上のような文脈で理解すべきだろう。だが、状況は厳しく、正吉は1929(昭和4)年4月に公表した論考「南予無産階級運動史(一)」で、この間の苦汁を次のよ

うに総括している⁴⁴⁾。

明星ヶ丘は斯の如く政治・経済の二面に亘って血みどろの闘ひを続けて来たが、其闘ひの反面には明星ヶ丘集団の究極の理想とする所を忘れなかった。即ち彼等は愛と平和に於ける全人類の結合を念願して邁進した。かくて経済に於ける総ての闘争は其の理想に到着する手段として止むにやまれぬ聖業の一つであるとなした。故に彼等はあらゆる社会悪に対して渾身の闘ひを続けると共に、其裏面に於ては常に人間の純情と自然を熱愛した。

二十幾年このかた絶え廃れた村々の盆踊りを復活したのも其の爲めであった。氏神祭の「ネリ」を復活奨励したのも其の爲めであった。殊に青年男女よりなる素人劇団を組織して村人に見えたるなどは(後のプロ芸術座)当時解放運動界の珍とする所であった。

然るに資本主義の発達と共に農村の疲弊衰微は年一年と其深刻を加へ、盆踊も祭礼も村芝居も何等農民の慰謝とはならず、わけて農村青年処女の離村して小都市工場店舗に労働する者日につき明星ヶ丘集団の其れ等に対する努力は殆んど水泡に帰してしまった。これ時代の変遷に伴う当然の現象とは云へ、それは又余りに悲惨荒蕪たる者であった。

農村の疲弊と迫りくる世界恐慌、三・一五事件以降の弾圧の強化と無産者運動の分裂といった事態に直面しての焦りなのであろう。正吉による上掲の総括は、農民運動・農村社会運動の指導者としてはいささか悲観的にすぎ、農村文化の創造や民俗の祭りの再生に展望を見出していない。たしかに、農村の窮乏は人びとに勤儉力行を強い、通俗道徳への関心を高めさせ、祭礼を抑制する傾向を強めた。だが、祝祭を禁圧してしまうと共同体の活力は枯渇する。民俗的祭りや娯楽の盛衰は、この時期の社会と文化、生活のありようを規定する重要な戦略的課題であった。

この頃、協調主義を標榜する工場では、盆踊りや相撲、芝居などの民衆娯楽は階級闘争の戦略的なフィールドになっていた。「明星ヶ丘マーク入赤色優勝旗」を用意して奉納相撲を企画した同じ日(1928年5月1日)、住友別子鉱山株式会社は「この日より三日間、例年の通り山神祭典を新居浜・東平・四阪島で開催、芝居・活動写真・相撲大会を行う。相撲大会は本年特に横綱賞・三役賞の授与あり、東西横綱の土俵入りを行い、観覧者一万人をこえる盛況」⁴⁵⁾と、娯楽を用いた労働者の統合に積極的な姿勢を見せていた。とりわけ、勤労者のあいだでポピュラーだった相撲は、労使間のヘゲモニーの争奪をめぐり、文化の戦場であったといえる。窮乏下の農村において

も、都市文化・労働者文化に拮抗しうる農村文化を展望するうえで、民俗的祭りや娯楽は農山村の若者の未来にかかわる争点たりえた。

こうしたなか、「明星ヶ丘我等の村」同人は、差別からの解放と弱者救済を目標にかかげ、「愛と平和」による「全人類の結合」と「世界人類は全一である」とする「世界主義」に立脚しながら、「衆議」にもとづく自治的な「村」と「国」の建設をめざし、「束縛」と「圧迫」を嫌って「規約」を設けず、活動内容や同人関係は各人の「良心」にしたがって律しようとした⁴⁶⁾。

正吉らはまた、選挙戦において、生きる目的が「労働する人間の幸福の増進」、「万人の幸福」にあるとし、階級的な差別や選別、抑圧のない社会をめざす経済闘争や政治闘争を解放の手段として意義づけ、言論・出版・結社の自由を求めて戦った⁴⁷⁾。正吉らの民俗文化や「奉納素人大相撲」への対応を振り返ると、時代状況や階級的な力関係の規定を受け、短絡して政治主義に走るきらいはあったが、基本的には、支配的な文化・教育・慣習・意識に対抗するオルタナティブを志向し、被支配者・無産階級を幸福に導く文化・科学・教育を展望しようとしたものであったとみなしうる。正吉らが考案したメデー・義民祭・奉納相撲の三位一体化や「明星ヶ丘マーク入赤色優勝旗」の企画を、政治・階級闘争の手段化であると断罪するのは、早計に過ぎよう。恐慌と弾圧、戦争のもとで未完に終わるこのプロジェクトは、新たな歴史的条件的のもとで再現されることになる。

Ⅲ. 盂蘭盆会奉納相撲の展開

1. 六地藏相撲と武左衛門相撲の融合

— 下鍵山大火・地藏堂建立・開催地変更 —

1929（昭和4）年の春、愛媛県師範学校の専攻科を終えて日吉小学校に赴任し、5年間在職した青木清憲は、後年、「こゝは日吉の下鍵山で早くから西予の交通の要衝として賑い、道筋を幸田の町といふ、土佐や梶原や宇和島、東宇和の土居などに通じ、一寸町の体裁をしていた。（中略）日吉神社の社殿を少し下ると、宮相撲の土俵があり、傍らに「武左衛門翁之碑」と刻まれた高さ数米の巨大な花崗岩の碑が建っていた⁴⁸⁾と述懐している。たしかに、青木が「宮相撲の土俵」と記した場所は、1918（大正7）年に遷宮され、翌年から大日吉神社と称された村社の境内のようだが、じつはそうではなく、井谷正吉らが建設に努めた明星ヶ丘の一画をなし、日吉村はじまって以来の賑わいになった建碑式（1927年）や祝祭行事が開催された場所だった。六地藏相撲も、やがて開催場所をここに転じる。その契機は、日吉村唯一の町場である幸田を襲った大火にあった。1935（昭和10）年6月27日、幸田



図4：地藏尊堂と六地藏

町の中心部から出火して3時間余りで商店街の大半を焼失（76戸を全焼、179人が被災）し、これを転機に下鍵山区民は地藏尊堂を明星ヶ丘の武左衛門碑の傍に移転・新築した。図4がその地藏堂と六地藏であるが、奉納相撲（六地藏相撲）もまた、ここで開催されることになる⁴⁹⁾。

この措置は、六地藏相撲の性格を大きく変えた。義民魂を具現する武左衛門碑の前で開催される盂蘭盆会の相撲は、武左衛門に奉納する相撲としての意味をもち始める。

戦後のことであるが、1952年代前半に青年団相撲で活躍した日向谷の宮本幸孝は、「六地藏相撲から代わったのが武左衛門相撲。武左衛門のその碑の前で取るけん武左衛門相撲。武左衛門のために相撲を取ったわけじゃないが、（中略）あっこを明星ヶ丘として、あっこへ祀って、それから、六地藏相撲とは言わなくなったんよ。武左衛門相撲として日吉村一帯、それから近所へと名が知れてきたんよなあ。自然に」という見解を示す。

宮本と同じ時期、近村の縁日相撲を渡り歩いた下鍵山の西村善太郎もまた、「意味は深いわいなあ。先祖を祀る。で、相撲を取って、武左衛門に悪事災難をお払いしてもらおうな、なあ。」「そうそう。お地藏さんにお頼みするか、お頼みいうても、おいそれと利くわけじゃないけど、やっぱり人間の気持ちよ。奉納しとるといふ。武左衛門いうのは、やっぱりお百姓さんの一揆で、それだけ心がなあ。で、あそこへ建てただけでもお百姓さんらは心がなごむというような意味もある」と振り返る。

こうして六地藏相撲は、下鍵山の施餓鬼に始まる盆行事の一環をなしながら武左衛門信仰と融合し、武左衛門の魂を供養する相撲として村の内外に広く知れわたるようになった。興味深いのは、このとき唄われた相撲甚句である⁵⁰⁾。

ゆうべ町に出て せんのカカに会うた おカカまめ
なか達者なか、まめであろうとあるまいと 去年8月
15日 春日まつりのその晩に腰巻1つで追い出され 今

では大事な殿がある 前さんのお世話にゃ なりゃしない (歌詞)

さむらい川へ蹴りこんで どこから先に浮いてきた
足から先に浮いてきた 何でもこいつは足軽 足軽(ハヤシ)

この甚句には、一方で、離縁された妻や出戻り娘など、けなげに生きる社会的弱者を励ましながら、他方において、男性中心の社会を揶揄して権力との共犯関係に陥ることへの自戒を促し、あわせて支配階級とその手先を嘲弄するという、シニカルでアイロニーに満ちた構図が存在する。歌詞とハヤシは、被支配者であった農民大衆の非権力ないし反体制的な気分を内包しており、反権力的な雰囲気を感じさせる点で、意図的ではないにせよ、恐慌と弾圧、戦争によって未完に終わった義農祭奉納相撲の開催趣旨と通底するところがあった。

さらにこの地は、大正後期から1930年代半ばにかけて、井谷正吉らが展開した農民運動・無産青年運動の拠点であった。このことを念頭におくと、仮説の域を出ないとはいえ、農地改革期の盂蘭盆会にはこの甚句が高らかに唱和され、相撲場は社会的・階級的な解放の気分が盛りあがったと考えられるのである。

2. 六地藏相撲から武左衛門相撲へ

— 下鍵山盂蘭盆会奉納相撲の広域化と隆盛 —

1950(昭和25)年春、井谷正吉は、「いま村では毎年一回武左衛門の供養を行うがそれと共に武左衛門相撲という草相撲行事を加えたから近隣からも夥しい人が集まって盛大である」⁵¹⁾との認識を示す。「明星ヶ丘我らの村」の建設を志し、義農祭奉納相撲を企画した彼にとって、万感の思いだったにちがいない。

1959(昭和34)年8月、和歌森太郎を団長とする「愛媛県宇和地帯民俗総合調査団」の一員として下鍵山を訪れた半田康夫も、外来者の目をとおしてではあるが、「地藏相撲」は「武左衛門相撲」と呼ばれるようになり、その主要な契機が「百姓一揆の頭目であったという武左衛門の霊を慰める」ことにあったと証言している⁵²⁾。六地藏相撲は、武左衛門相撲として名をなし、普及していった。

では、武左衛門相撲という呼称の流布は、一揆指導者の追善や義民魂の宣揚とどう関係したのだろうか。最盛期に青年力士として活躍した上鍵山の山口孝は、「相撲取っているときはそんなもの意識はせんけど。イベントはもちろん武左衛門さままでなあ。手を合わせて、みんな子どもの時分から武左衛門さま、武左衛門さま、言うて。武左衛門さまいうたら神さまやったなあ。昔からわしらは、崇拜しよってなあ、小さいときから。農民のために犠牲になって、打ち首になったけんなあ。(中略)武左衛門を

偲ぶためにもなあ。大きな意味があったわけよ」と回顧する。すなわち、相撲そのものから自然発生的に武左衛門尊崇の念が湧き立ったわけではない。武左衛門への信仰心は、それにかかわる語りやシンボル、儀式、作法、経験を介して培われた。奉納相撲は、その共振板あるいは増幅器としての役割を担ったのである。

六地藏相撲には盛衰があった。『日吉村誌(明治百年記念)』は、「戦後二十年代には引き続き高知県、宇和島、東宇和郡辺りからも「相撲取り」が来てかなり盛大に行われた。しかしその後若い人達が大都市に集中するようになって「相撲取り」が激減して昭和三十四、五年来今日では六地藏様や、武左衛門様への奉納相撲も子供相撲でお茶をにごす程度になってしまった」⁵³⁾と記している。表1に見られるように、相撲の盛衰は日吉村の人口動態と相関した。奉納相撲のピークは1950年代の半ばであるが、まさしく人口・世帯数・児童数の動向と重なる。さらに興味深いのは、表2に示されるように、この行事の盛衰が日吉村における農林業の発展、とりわけ50年代から60年代にかけての林業の成長と符合することである。建設業、製造業、卸売・小売業、サービス業などの成長、すなわち産業構造・就業構造の多様化は50年代に始まり、以後、農林業の衰退に反比例して増勢にむかう。ただし、高度成長期以降に顕現する諸産業・業種の多様化は、人口減と農林業の衰退の副産物であるともいえ、したがって、奉納相撲の衰退を阻止する要因とはなりえなかった。下鍵山の盂蘭盆会奉納相撲(六地藏相撲・武左衛門相撲)の社会経済的な基盤は、1950年代半ばのピークが象徴するように、日吉村の農林業であった。

大正期から昭和戦前・戦後にかけて日吉村のヒーローとして活躍した草相撲力士に、日の出山(井上清・日向谷)、白王山(栗野守三郎・日向谷)、若錦(宮口馬太郎・日向谷)、小若錦(宮口梅吉・日向谷)、一方山(馬木国男・上鍵山)、祇園灘(中島福吉・上大野)らがいる。1950年代前半に下鍵山の青年団員として六地藏相撲の運営にかかわった山本喜久夫は、「四隅の柱の下へは、昔の相撲の経験者に座ってもらってなあ。まあ青年団がやりよったし、ここの部落でむかし地相撲で相撲を取りよった人らにも全部、相撲のときには協力してもらって、問題が起こったときには仕切りをしてもらう人もありましたなあ。そういうことで運営をしまりました」と述懐しており、戦前の奉納相撲の運営や競技の仕組みは、1920年代生まれの草相撲力士を介して戦後に伝えられたのである。

以下、50年代半ばに村の内外で活躍した青年力士からの聞き取りをもとに、最盛期にあたる1950年代後半の下鍵山盂蘭盆会奉納相撲を再現してみよう⁵⁴⁾。

相撲当日である8月24日、午前中に念仏と念仏供養太



図5：青年団対抗相撲の上鍵山選抜力士

鼓の仏事をすませ、午後には下鍵山区を「勸進元」にして競技を始める。最初に「土俵開き」(塩払いと口上)があり、次に子ども相撲と青年団による各区対抗の団体戦が行われた(図5)。このあと東(勸進元)と西(寄り方)に力士を配置して個人戦に移行する。

個人戦ではまず、前座にあたる「少々五人」が「跳びつき」勝負で行われ、ついで勸進元の「お好み」による「三役相撲」に移行、ここでは東西の小結・関脇・大関に任じられた力士が揃い踏みをし、役ごとに一番ないし二番対戦したあと、力士に「前花」が贈られた。そのあと「中入り」となり、勸進元が力士を介して赤飯の握り飯、いわゆる「力餅」を振る舞った。

中入り後、他町村の力士も加わって相撲はいよいよ佳境に入り、「小五人」、「中五人」、「大五人」の熱戦を繰り返して、結びの一番を引き分けにして「打ち止め」になる。ここでは選定された2名の力士が立ち合ったあと四つに組み、周りにいる力士がそれをフォローして土俵上で対峙する体勢に入る。このとき行司が即座に「この相撲、行司待った。両力士ご名人なれば引き分け、来年の今月今夜、この土俵において優勝決定戦を行ないますれば、この勝負六地藏預かりといたします」⁵⁵⁾と声をかけ、勝負の結着を翌年に持ち越すのである。このあと、居合わせる力士が土俵を囲んで勸進元の「家内安全・無病息災・沖は大漁・岡万作・商売繁盛」という口上を聞き、手打ちの締めで「打ち上げ」となり、これをもってこの年の三十三結びの相撲を終える。この夏相撲のあと、腕と体に自信のある若者は、豊稔神事の余興として各地で開催される秋の宮相撲を渡り歩いた。8月24日の相撲の行事に関連して、いくつか補足しておこう。

第1に、「跳びつき」とは、勝った力士に対して四股や仕切り抜きにどこからでもかかっていき、3人ないし5人を抜く取組のことで、鼯肩力士の活躍や、勝敗の即興性や速さ、意外性のある相撲の展開を求める観客や鼯肩衆

の意向に応じて導入された。役員にとっては、出場力士の実力を計り、以後の番付の参考にする機会になった。

第2に、「小五人」は、東西5～6名の力士が5人抜きを競う取組で、「小五人」「中五人」「大五人」とランクが上がるにつれて強豪が参戦し、地元力士の勝敗が観衆を沸かせた。

第3に、結び相撲の「預かり」は儀礼的行為であり、勝負を来年に持ち越し、今後も奉納を続けることを意味するが、勝敗がその年の収穫や漁獲、人事の豊凶の予断になることを退ける意味があったとの伝承もあり、こうした相撲習俗は立間村の「卯の刻相撲」など、南予の他の地域にもみられた。

第4に、草相撲に祝儀や賞金・賞品はつきものだが、山口孝が「武左衛門相撲いうやつは、もう景品の取り合いじゃけんなあ。これは試合じゃけんなあ。全然意味が違う。中身がなあ。」と語るように、各力士は名誉の記念品であるボデン(白い和紙を挟んだ孟宗竹の串)より、ハナ・賞金・高額の賞品を競い合い、ときには仲間内で均等に配分した。

第5に、幸田の町の商店主や相撲好きの篤志家、地区の有志が金品を寄付し、8月24日の翌日に「裏づけ相撲」を開催した。ただし、この慣習は70年代前半に途絶える。

最後に、六地藏・武左衛門相撲は盂蘭盆会のフィナーレを飾る祝祭行事であり、そこにはハレの気分が横溢した。『日吉村誌(明治百年記念)』は「夏の夜、涼風に吹かれながら宮相撲の土俵を取り囲んでそれぞれひいきの相撲に「ヤンヨ、ヤンヨ」を連発して声援を送ったり、ある者は勝負の判定に文句をつけていきり立ったり、その場限りではあるが「寄り」、「勸進元」対抗で相撲をとる者よりも見物人同志^(ママ)の応酬で大騒ぎをして楽しんだ」⁵⁶⁾と記す。先に紹介した上鍵山の山口孝も、「武左衛門相撲いうたら、多くの力士が他所から来て、泊まってなあ。それは、とてもじゃないが凄かってなあ。観衆もあの広場に入れんくらい居ったけんなあ。観衆がなあ。お客さんが。あそこに桜の木と階段があるんじゃけど、桜の木に登ったり、階段がずうっとお客さんがなあ。びっしりの人でなあ。年に1回の24日の相撲ちゅうて。ほかに娯楽が無いけんなあ。唯一の娯楽で、露天商がずらっと軒並べてなあ。ワイな騒動よ」と、最盛期を振り返る。

六地藏・武左衛門相撲は、娯楽が少なく、テレビが普及していない時代にあって、日吉村最大の娯楽イベントになり、村中の関心を集めた。土俵の周辺は立錐の余地もなく、機を逸した観衆は樹木に登って観戦し、老若男女、貴賤や貧富、出自や在所、地主や小作にかかわらず群れをなして応援した。地元力士が他郷の強豪に勝利したときは「ヤンヨー」(「ござあみろ」の意)の喝采が谷間にこだまし、屋台や出店もまた、祭りの気分を盛り

あげた。ある婦人(1943年生まれ)は、「子どもの頃、男の子も、女の子も、盂蘭盆の奉納相撲が楽しみだった。屋台や出店が出て、親戚の人が泊まりに来て、8月24日は夏休みが終わる直前だったが、宿題もせずに相撲を見に行った。相撲が楽しいのではなく、小遣いと遊び、祭りが楽しかった」と追憶する。六地藏・武左衛門相撲は、たんなる祖霊供養や葬送儀礼ではない。奉納競技である相撲は、農林土木の作業に必要な肉体の力を公衆の面前で躍動させ、日常と非日常、ハレとケ、俗界と他界、生者と死者、こころとからだ、貧富・地位・身分の境界をあいまいにし、連帯感と解放の気分を喚起して山峡の生活者に活力を与えた。そこに生起するのは、固定的な民俗行事ではなく、可変性に富んだ民衆の祝祭文化・娯楽であった。そこでは、民俗的祭りの系譜を引きつつ、大衆文化をはじめ、さまざまな文化・生活領域が融合し、都市と農村の交流が図られた。相撲行事が人を育て、人と人を結びつけ、地域を躍動させたのである。

3. 六地藏相撲への回帰 一過疎化の進行と規模の縮小一

「相撲祭り」とか「日吉村夏場所」といわれた下鍵山の盂蘭盆会奉納相撲は、1960年代以降の若者の都市流出とともに規模を縮小し、60年代末には「子供相撲でお茶をにごす程度」になる。その社会経済的要因は、表1と表2にリアルに示されている。昭和戦前期まで3千人台だった人口は、1947(昭和22)年に4千人を超え、1955(昭

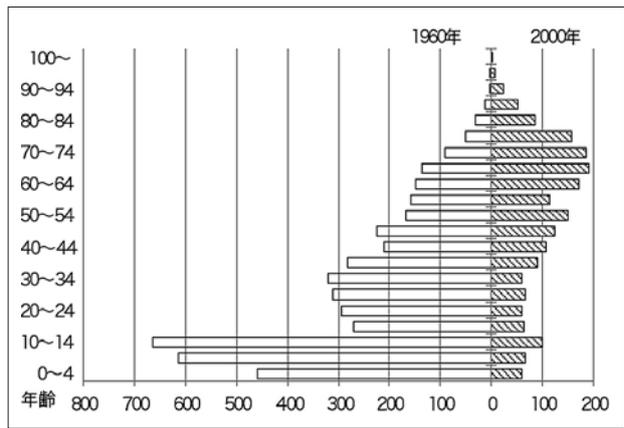


図6：日吉村の年齢階層別人口構成(1960年/2000年)

注) 愛媛県地方振興部統計調査課『人口・就業者』1975年、総務省統計局『平成12年国勢調査報告』(第2巻その2, 38 愛媛県) 2001年による。

和30)年には4,779人に達した。しかし、その後、高度成長のもとで若者が都市に流出し、30年間で人口は半減する。過疎化の勢いは止まらず、2000年の人口には1,933人(うち男子47%、世帯数725)に落ち込み、減少はいまも続く。世帯数に人口ほどの大きな変化はないが、表1に示す児童数の減少から明らかのように、少子化傾向が著しい。小学校に通学する児童はピーク時であった1950(昭和25)年の7分の1に減少している。このことは図6からも容易に読みとれよう。日吉村では、すでに

表1：人口・世帯数・児童数の推移(日吉村)

年	人口	世帯数	児童数
1887(明治20)年	2637	475	138
1914(大正3)年	3,134	569	
1920(大正9)年	3,221	752	390
1925(大正14)年	3,430	757	
1930(昭和5)年	3,513	728	487
1935(昭和10)年	3,597	721	546
1940(昭和15)年	3,633	730	557
1947(昭和22)年	4,204	807	
1950(昭和25)年	4,569	809	688
1955(昭和30)年	4,779	859	656
1960(昭和35)年	4,444	893	782
1965(昭和40)年	3,685	831	520
1970(昭和45)年	2,964	776	357
1975(昭和50)年	2,609	724	251
1980(昭和55)年	2,528	739	168
1985(昭和60)年	2,236	756	165
1990(平成2)年	2,164	741	123
1995(平成7)年	2,081	762	105
2000(平成12)年	1,933	725	99

注1) 人口と児童数の単位は人。

注2) 「日吉村勢要覧2002」より作成。

表2：産業別従業者数の推移(日吉村、1920~2000年)

	1920年	1930年	1950年	1960年	1970年	1980年	2000年
農業	1,195	1,197	1,372	919	818	603	145
林業・狩猟業			249	597	91	38	19
漁業・水産業							3
鉱業	5	1	36	21			
建設業			98	58	108	205	181
製造業	132	128	106	82	95	123	116
卸売・小売業	84	129	105	177	121	150	119
金融・保険・不動産			2	13	4	3	5
運輸・通信	30	37	87	84	91	76	45
電気・ガス・水道				4	1	1	2
サービス業			112	174	186	212	216
公務	43	46	23	32	39	56	50
分類不能・その他	58	59	1	1		1	
総数(人)	1,547	1,597	2,231	2,162	1,554	1,468	901
総世帯	752	728	809	893	776	739	752
総人口	3,221	3,513	4,569	4,444	2,964	2,528	1,933

注1) 1920年の各職業の数値は「本業者」のみ(「本業ナキ従属者及家事使用人」は除く)。

注2) 1920年と1930年の「公務」は自由業を含む。

注3) 1950年の統計は14歳以上の統計。

注4) 2000年の「卸売・小売業」は飲食店を含む。

注5) 「国勢調査」各年度より作成。

60年代初頭から少子化の兆候が見られるが、それでもこの頃には10歳代半ばまでの人口が圧倒的に多く、子どもの溢れる村であった。ところが、2000（平成12）年になると、慢性的な高齢化社会の状況を招来する。

メインとなる祝祭行事の衰退は、村そのものの衰退を加速させる心理的要因になる。こうした事態を打開するための企画が、1970（昭和45）年の過疎振興地域指定を契機とする公共土木事業の積極的導入と、70年代半ばから開始された「村おこし」運動だった⁵⁷⁾。

前者については、日吉村生活改善センター落成（1977年）、国道197号高研トンネル貫通（1978年）、日吉中学校鉄筋3階建校舎落成（1978年）、植松村営住宅落成（1978年、1979年）、みどり保育園落成（1979年）、農村広場竣工（1980年）、国道197号下鍵山・上鍵山間開通（1980年）、日吉村庁舎・住民センター落成（1982年）、国道197号高研地区全線開通（1987年）など、国土開発や過疎対策の一環として計画された諸事業がある。70年代半ばからほぼ10年間は拡充期で、大部分は河野幸男村長（1976年就任、1992年退任）の時期に実現をみた。

後者については、公共事業による経済的な潤いを背景に、武左衛門を前面に押し出し、日吉村を「一揆の里」として宣揚して「村おこし」をしようとする一連の企画が河野村政のもとで展開された。「武左衛門ふる里まつり」がその例で、1985（昭和60）年8月24日の第1回「ふる里まつり」は、日吉中学校のグラウンドを主会場に、子ども相撲・奉納相撲・餅まき大会・武左衛門おどり発表会などが実施され、前年の六地藏奉納相撲大会の「数倍の千人以上の見物客」⁵⁸⁾が訪れた。翌年には「武左衛門太鼓」が考案され、1985（昭和62）年から一揆を再現する「武左衛門行列」が始まり、以後、盆前後の催し物を集約するかたちで企画され、仮装行列、盆踊り大会、綱引、武左衛門太鼓、民謡や歌謡ショー、成人式などを盛り込んだ新イベントとして定着し、帰省客を加えて参加者は村の人口の2倍に膨れ上がるようになった。

注目すべきは、「武左衛門ふる里まつり」が、「毎年八月二十四日に開かれる「武左衛門奉納相撲大会」がさびしくなる一方だったことから、もう一度昔のにぎわいを取り戻してゆくゆは同村を代表する夏祭りにしよう」と計画された⁵⁹⁾ことである。だが数年後、イベントの最中に人身事故があり、これを機に奉納相撲と「ふる里祭り」は分離され、別の道を歩むことになる。

とはいえ、河野村長による武左衛門を前面に立てた「村おこし」事業は、六地藏相撲が武左衛門相撲でもあることを村民に再認識させるきっかけになった。たとえば、日吉村広報誌『広報 ひよし』は、1984（昭和59）年に「六地藏奉納相撲（武左衛門相撲）」、1993（平成5）年は「武左衛門・六地藏奉納相撲大会」、1994年には「六地藏

奉納武左衛門大会」と、武左衛門の名を冠して広報活動を行なっている。しかし、2001（平成13）年以降は「六地藏奉納相撲」または「六地藏奉納相撲大会」のチームが用いられ、武左衛門相撲という呼称は用いられなくなる。この行事は六地藏相撲へと回帰していったのである。

近年の下鍵山の盂蘭盆会奉納相撲の展開は、規模の縮小と六地藏相撲への回帰として特徴づける。以下に主要な特徴を示しておこう。

第1に、青年団の衰退（1995年活動休止）により、かつて衆目を賑わした各区青年団の選抜選手による団体戦、いわゆる青年団相撲は幕を閉じた。

第2に、公民館6分館を単位にした分館対抗戦（1987年～）や小学校対校戦（2004年～）が新たに導入され、近隣の町村対抗相撲が復活（1992年）するなど、2000年前後に新しいプログラムが定型化され、150名ほどの参加力士をキープすることができるようになった。その結果、①「小学生以下」（年齢別）、②「成人一般」の個人戦、③「高校対抗」、④「分館対抗」、⑤「町村対校」の団体戦という、5つの部門で構成される番組編成が定着する。

しかし、第3に、2009（平成21）年以降、力士の高齢化と後継者難、選手不足のため、小学校の部を除いて団体戦を編成しえず、個人戦も少人数でお茶をにごすようになり、参加力士も50名程度に減少した。

第4に、大会への公的補助は1999（平成11）年の120万円をピークにして、その後4分の1に減少し、好転はみられない。

第5に、2011（平成23）年以降、小学生を中心とした子ども相撲に変貌する。町村合併後も、事態を好転させることはできなかった。

だが、こうした一連の変化を、過去を基準に衰退と断ずるだけでは展望は見通せない。柳田民俗学が喝破したごとく、多くの村々の祭礼や芸能・競技の担い手は、時代をへるにつれて壮年から若者、さらに子どもへと移行していくのが常であり、小学生主体の行事に変貌したとはいえ、合併を機に参加対象を日吉以外の子どもたちに拡大したことは、1つの光明であるといえる。

おわりに

六地藏相撲・武左衛門相撲は、経済の高度成長がもたらした1960年代以降の若者の都市流出によって多くの担い手を失い、規模を縮小させた。高度成長期以降の地域開発計画にもとづく公共事業の導入や過疎対策事業、さらに河野村政が積極的に奨励した一連の「村おこし」事業も、この趨勢を変える決定打にはなりえず、村民の年中行事と娯楽を代表してきた盂蘭盆会奉納相撲を再生す

る糧にならなかった。しかし、この要因を日吉村にのみ帰せしめるわけにはいかない。道路や交通網の整備が、逆に、過疎化や伝統文化の空洞化を加速するといった事態は、外発的な要因抜きに考えられないのである。

したがって、日吉村の相撲の盛衰は、人口動態や産業構造の変化、公共事業の導入といった事柄だけでなく、それと同時並行的に進行した社会や文化の総体的な変化、すなわち、生活様式全般の都市化、テレビの普及に象徴される都市的大衆娯楽の流入と余暇の多様化、個人主義的傾向の増大、核家族化と少子化、受験競争の過熱や部活動の拡充にともなう児童生徒の多忙化など、多様な要因を視野に入れて考察する必要がある。裸や禪姿ふんどしを嫌う子どもや部活を優先して伝統行事に参加しない子どもの出現、わが子の出番が終るとすぐ相撲場から退席して帰宅する親などの登場、あるいは相撲人気の相対的な低下ないし不人気は、日吉村固有のものではなく、日本、いやグローバルな社会・経済・文化的な変化と連動しており、その一環をなすといえる。

こうした観点から前述の日吉村の趨勢を「中心」と「周縁」、あるいは「中央」と「地方」という枠組みのもとで眺望すれば、日吉村、すなわち「周縁」・「地方」の問題は、大都市つまり「中心」・「中央」の問題でもあり、両者の相互関係の再発見・再構築こそが未来を展望する鍵だということになろう。日吉・下鍵山の相撲文化もまた、そうした相互関係・相互作用の媒介環に布置しているものと考えうる。

日吉村はながらく、地方自治を自認して県行政の推し進める町村合併政策に抗してきた。しかし、少子高齢化のもと、個別地方公共団体としての存続を断念し、平成の大合併の唱和を受け入れ、2005(平成17)年に広見町と合併、鬼北町の一部として未来を展望する道を選んだ。この合併は旧日吉村の相撲文化の広域化の機会になりうるが、他方で、日吉という地域単位の消失を促し、地域アイデンティティを後退させることにもなりかねない。町村合併は、生活者にとって両刃の剣であるといえる。

このことに関連して、旧日吉村で唯一街並みを形成し、政治・経済・行政の中心をなした通称幸田町の盛衰に留意しておこう。下鍵山の盂蘭盆会奉納相撲の最大の魅力の1つは、素人力士が賞金やハナ、賞品を稼ぎ合うことにあり、主要な財源は各戸からの寄付だけでなく、商店主や事業家たちが担っていた。幸田町の開発は、1900年代初頭、土地の所有者であった井谷正命が私財をなげうち、道路建設に合わせて市街地の形成に努めたことに始まる。1907(明治40)年の日吉・宇和島間の車道の開通によって商工業者が増大し、大正初期には専業の旅館、料理店、飲食店も開業、昭和になると自動車を利用した日吉・宇和島間の日帰りも可能になった⁶⁰⁾。戦後は商工

会組織が率先して村おこし事業に加わり、区長・組長らとともに奉納相撲の運営に積極的に参画した。しかし、全村的な過疎のなかで一定の人口を維持し続けてきた幸田の町も、経済の停滞と少子高齢化、周辺市街地への顧客の流出などによって活力を減退させており、盂蘭盆会奉納相撲の経済的・組織的基盤は転換期を迎えている。視野の拡大と新たな意義づけが求められているといえよう。

下鍵山の盂蘭盆会奉納相撲(六地藏相撲・武左衛門相撲)の未来にかかわって、いま1つ留意すべきは、最盛期には義民を顕彰する意義を担って展開したこの行事を、起源にこだわることによって六地藏相撲に回帰させ、下鍵山区の地域限定行事に回収しようとする近年の方向性である。たしかに、起源への執着は、この相撲行事に強力な持続力を与える。しかし、こうした動向は、結果的に、この行事の伝統、したがってまた六地藏相撲の発展に寄与してきた過去のさまざまな営みをそぎ落とすことにもなりかねない。起源説の固執が、歴史の忘却に繋がるのが危惧されるのである。

だが、この相撲行事は固定的・不変的なものではなかった。人びとはヤンヨ・ヤンヨの大騒ぎのもと、社会的地位や貧富の差を投げ打って身体力を発揮し合うことに意義を見だし、祖霊信仰や厄払い、義民追善、民俗的祭り、娯楽や競技など、さまざまな社会的要素を取り入れながら、解釈と再解釈を繰り返してきた。そこには、ハレとケ、日常と非日常、現実と虚構、過去と現在、生と死、再会と別れの交換や四季の転換を促し、生活世界を多元的に構成して集団的に社会を更新しようとする意図が存在した。起源を大切に、歴史を振り返ることの意義は、こうした過去が内包する多様な可能性と変革の契機に目を見開き、「過ぎ去ったもののなかに希望の火花を掻き立てる」⁶¹⁾ことにあると思うのである。

注

- 1) 以下、日吉村役場編『日吉村勢要覧 2002』日吉村役場、2002年、参照。
- 2) 和田重作「山の彼方のアルカディア 武左衛門一揆とメーデーの村」『愛媛の文化』第31号、1992年10月、66-67頁、参照。なお、本稿は鬼北町に属する以前の日吉村に関する諸事象を考察の対象にする。こうした時期設定を考慮し、以下、鬼北町日吉を日吉村と表記する。
- 3) 半田康夫「旅芸人・競技」和歌森太郎編『宇和地帯の民俗』吉川弘文館、1974年(初版1961年)327-328頁。
- 4) 日吉村誌編集委員会編『日吉村誌(明治百年記念)』日吉村中央公民館、1968年、202頁、211頁、259-260頁。
- 5) 宇佐美隆憲「日吉村の「六地藏奉納相撲」」同『草相撲のスポーツ人類学—東アジアを事例とする動態的民俗誌—』

- 岩田書院、2002年、107-122頁、所収。
- 6) 高津勝編『聞き書き 武左衛門相撲 (別名・六地藏相撲) —愛媛県北宇和郡旧日吉村の民俗行事—』こども教育宝仙大学高津研究室、2013年。以下、『聞き書き 武左衛門相撲』と略す。なお、本稿に引用する日吉村在住者からの聞き取りはすべて、同書からの引用であるが、紙数の都合で引用箇所(頁)の記載は省略する。
 - 7) 酒井隆仁ほか編『日吉の民話』日吉村教育委員会、2004年。なお、日吉村誌編集委員会編『日吉村誌』日吉村教育委員会、1993年、568-597頁をも参照。
 - 8) 山口孝インタビュー(1936年12月生まれ。上鍵山在住。2011年7月23日実施)。
 - 9) 日吉村誌編集委員会編『日吉村誌 続編』日吉村教育委員会、2004年、211-214頁。
 - 10) 前掲『日吉村誌 (明治百年記念)』270-271頁。および、前掲『聞き書き 武左衛門相撲』40-41頁。
 - 11) 日向谷誌編集委員会編『日向谷誌』北宇和郡日吉村日向谷分館、2004年、98頁。
 - 12) 「地元の豆力士、十数年ぶり熱戦 日吉日向谷で奉納相撲大会」『愛媛新聞』1993年4月27日(日吉公民館スクラップブック)。
 - 13) 「地藏囲み“予土親善”日吉村地藏山の縁日」『愛媛新聞』1978年5月3日(日吉公民館スクラップブック)。
 - 14) 「ふるさと百山43地藏山」『愛媛新聞』1977年8月18日(日吉公民館スクラップブック)。および、前掲『日吉村誌 続編』215頁。横山昭一「えひめ・学・辞典31『相撲王国』の今昔」『文化愛媛』57号、2006年10月、45頁をも参照。
 - 15) 前掲『日吉村誌 続編』214頁。
 - 16) 原田誠太郎『下波村誌』清家金治郎、1998年(1912年版の複製)、109頁。
 - 17) 薬師寺恭吉編『多田村誌』多田村役場、1911年、67頁。なお、多田村は1899年の村制施行により成立。藩政期は宇和島藩領多田組。1954年の合併で宇和町、現在は西予市に所属。
 - 18) 『喜佐方村史』喜佐方公民館、1958年、420頁。
 - 19) 前掲『宇和地帯の民俗』327-329頁。
 - 20) 前掲『日吉の民話』46頁、参照。前掲『日吉村誌』584頁をも参照。
 - 21) 葛本重利「六地藏奉納相撲(武左衛門相撲)」2011年8月29日(A4版、3枚。鬼北町日吉公民館、所蔵)。以下、葛本重利「覚書」と略す。
 - 22) 「激しい取組 今も変わらず 日吉 伝統の相撲大会」『愛媛新聞』2001年8月30日(日吉公民館スクラップブック)。
 - 23) 「豆力士に大声援 日吉 伝統の「武左衛門奉納相撲」」『愛媛新聞』1984年8月26日(日吉公民館スクラップブック)。
 - 24) 伊野香織・窪田瑞穂・藤中美穂「日吉中の一人1研究から25 明星が丘の六地藏」『うわじま』1994年10月13日(日吉公民館スクラップブック)。
 - 25) 造立時の所在地は国道197号線と320号線が交わる付近で、現在と異なる。なお、宇佐美隆憲も、六地藏の制作を1755(宝暦5)年としている。ただし、典拠は示していない。前掲『草相撲の人類学』120頁、参照。
 - 26) 渡浩一『地藏さんの世界 救いの説話・歴史・民俗』慶友社、2011年、73頁。地藏信仰については、同書、27-28頁、37頁、150-152頁を参照。なお、五来茂『石の宗教』(講談社学術文庫、2007年)によれば、地藏信仰は「祖霊」または「祖先」の仏教化であって、7月(今は8月)24日の地藏盆には各所で盛大な祭りが催されるが、これは「本質的には辻々にまつられた道祖神(岐神)の祭りであって道祖神の地藏化にともなって、地藏盆になったものである」(265頁)。
 - 27) 「取り組みに笑いと拍手」『広報ひよし』第191号、1981年10月1日、3頁。
 - 28) 永原慶二監修『岩波 日本史辞典』岩波書店、1999年、137頁。なお、武左衛門一揆については、前掲『日吉村誌 (明治百周年記念)』24-41頁、前掲『日吉村誌』32-49頁、613-637頁、前掲『日吉村誌 続編』194-200頁をも参照。
 - 29) 井谷命正編『嗚呼武左衛門翁及宇和史ノ概要：外五種』河野活版所、1917年、20頁。
 - 30) 日吉商工会・日吉村おこし実行委員会編『ひよしむらの先覚者 義農武左衛門物語』1989年、16頁。前掲『宇和地帯の民俗』307-308頁をも参照。
 - 31) 前掲『日吉村誌 (明治百周年記念)』260頁。
 - 32) 前掲『日吉村誌』583-584頁。
 - 33) 以上、前掲『日吉村誌 (明治百周年記念)』254頁、260頁、および、前掲『日吉村誌 続編』546-547頁、596頁、599頁を参照。
 - 34) 前掲『嗚呼武左衛門翁及宇和史ノ概要：外五種』1頁。
 - 35) 鬼北町教育委員会編「井谷家二代記—地域の発展に懸けた親子の軌跡—」2012年、3頁。なお、井谷正命については、前掲『日吉村誌』639-643頁をも参照。
 - 36) 山村豊次郎(宇和島市長)「弔辞」1934年10月30日(前掲『日吉村誌』642頁、所収)。
 - 37) 前掲『嗚呼武左衛門翁及宇和史ノ概要：外五種』21頁。
 - 38) いずれも前掲『嗚呼武左衛門翁及宇和史ノ概要：外五種』所収。なお、井谷正命による一揆資料の発掘と史実の解明については、正吉が安藤神社から借り受けた「庫外禁止録」(執筆者は一揆当時、吉田藩の中見役であった鈴木作之進。1795(寛政7)年、記帳)の転写(1927年)をもってピークを迎える。同写本は1981(昭和56)年6月、井谷家から発見され、1995(平成7)年、上田吉春・松浦洋一編『庫外禁止録(井谷本)復刻版』日吉村教育委員会として刊行された。
 - 39) 篠崎勝「民衆の集団—一九二〇年代の井谷正吉—」(井谷正吉生涯記編集委員会編『風雪の碑 明星ヶ丘—井谷正吉伝—』井谷正吉顕彰事業推進委員会、322-323頁、所収)、参照。

- 40) 「明星ヶ丘のメーデー 平穩に終わる」『南豫時事新聞』1928年5月2日。
- 41) 前掲「民衆の集団——一九二〇年代の井谷正吉——」233-234頁。
- 42) 「発展する南予無産青年同盟 日吉と三間に支部設立」『平民』1927年8月1日(愛媛県商工労働部労政課編『資料 愛媛労働運動史』第6巻、1963年、249頁、所収)。
- 43) 「大衆党南予青年部奮闘」『平民』1930年4月25日(愛媛県商工労働部労政課編『資料 愛媛労働運動史』第7巻、1964年、283頁、所収)。
- 44) 井谷正吉「南予無産階級運動史(一)」『愛媛毎日新聞』1929年4月15日(愛媛県商工労働部労政課編『資料 愛媛労働運動史』第7巻、1964年、158頁、所収)。
- 45) 『改善』1928年7月3日(同上書、50頁、所収)。
- 46) 「明星ヶ丘綱領」(前掲「南予無産階級運動史(一)」440頁)。
- 47) 井谷正吉『農村の貧乏と県会選挙 全国農民組合は如何に闘ふか』全国農民組合南予地方協議会、1931年、8頁。
- 48) 青木清憲「鍵山の印象 一武左衛門一揆の事など一」『愛媛』第1巻第11号、1962年2月、5頁。
- 49) 前掲『日吉村誌(明治百年記念)』の「年中行事」の節に「大正十年に六地藏堂が現在の武左衛門広場に移されてからはこの広場で行われるようになった」(202頁)とあり、「名勝」の節には「昭和十年この社殿のある広場の下に(中略)七月二十四日の奉納相撲の御本尊を安置する地藏堂をここに移した」(259頁)とある。記述が齟齬するが、武左衛門広場の地藏尊堂が移転・新築されるのは1935(昭和10)年であり、本稿は六地藏相撲の開催地変更をこの年以降とした。
- 50) 前掲『宇和地帯の民俗』328頁。
- 51) 井谷正吉『ちんがらまんがら』文藝書房、2003年(1950年版の復刻)、228頁。
- 52) 前掲『宇和地帯の民俗』327-328頁。
- 53) 前掲『日吉村誌(明治百年記念)』202頁。
- 54) 以下は、前掲『聞き書き 武左衛門相撲』所収のインタビュー記事をもとに記述。
- 55) 葛本重利「覚書」による。
- 56) 前掲『日吉村誌(明治百周年記念)』211頁。
- 57) 以下、公共事業ならびに「村おこし」に関する記述は、注記しないかぎり、前掲『日吉村誌』と前掲『日吉村誌続編』を参照。
- 58) 「にぎわい復活 武左衛門相撲 日吉村・ふる里祭り」『愛媛新聞』1985年8月26日(日吉公民館スクラップブック)。
- 59) 「日吉村の目玉行事に24日の武左衛門まつり」『愛媛新聞』1985年8月22日(日吉公民館スクラップブック)。
- 60) 前掲『日吉村誌(明治百年記念)』79頁、102頁、118頁、128頁。
- 61) W・ベンヤミン:久保哲司訳『近代の意味』(ベンヤミン・コレクション1)ちくま書房、1995年、662頁。